

フッサールと自己組織性

浜渦 辰二

jsshama@hss.shizuoka.ac.jp

はじめに

近年、複雑系／自己組織性／オートポイエーシスをめぐる研究のなかで、現象学との接点が議論されてきている。そうした研究と現象学的研究の間に架橋する可能性ないし必要性が主張されている。ここでは、フッサール研究という観点から、フッサール現象学と複雑性／自己組織性との関係について論ずることにしたい¹。

このテーマに関係する二冊の本(『自己組織性とはなにか』、『複雑系を考える』)²を見ても、残念ながら、両者の直接的(!)な関係について論ずるための材料を見つけることはできない。そこで、筆者の関心の出発点となった吉永良正『「複雑系」とは何か』³を振り返ってみると、例えば、複雑系とは、「無数の構成要素から成る一まとまりの集団で、各要素が他の要素とたえず相互関係を行っている結果、全体として見れば部分の動きの総和以上の何らかの独自のふるまいを示すもの」(15頁)と思ってしまう。さらに、吉永は、「複雑系の科学の根底にあるものの見方は、現象学のアプローチに非常によく似ている。つまり、この科学は〈世界〉の〈世界性〉を問おうとしているのだ。哲学からの自立を急いだがゆえに近代科学が失ってきたものが、存在論的な意味での〈世界〉であったとすれば、複雑系の科学は文字通り、「失われた〈世界〉(ロスト・ワールド)」への旅となるであろう」(19頁)、とも書いている。このあたりが、接点を考える出発点となるだろう。

もう少し、哲学畑・現象学畑の人が書いたものを探してみると、例えば、佐藤康邦「現象学とシステム論」⁴、野家伸也「認知論的転回—認知科学における現象学的思惟」⁵／「生命システムとしての意識—現象学とシステム論の統合に向けて—」⁶、貫成人『経験の構造』⁷、などを挙げることができるだろう。それぞれ、問題の接点に関わることのみを簡単に紹介しておこう。

¹ ドイツ統合学会設立準備のためのシンポジウムが、2004年10月14日、ボンで開催されたが、その際、池田善昭・日本統合学会研究所所長も、この点を指摘していた。因みに、本稿は、同シンポジウムでドイツ語で発表された原稿の和訳に若干手を加えたものである。

² 吉田民人・鈴木正仁編著『自己組織性とはなにか』ミネルヴァ書房、1995年。今田高俊・鈴木正仁・黒石晋編著『複雑系を考える』ミネルヴァ書房、2001年。

³ 吉永良正『「複雑系」とは何か』講談社現代新書、1996年。

⁴ 新田義弘編『フッサールを学ぶ人のために』世界思想社、2000年10月、所収。

⁵ 『思想』岩波書店、2000年10月号、所収。

⁶ 『フッサール研究』創刊号、2003年3月、所収。

⁷ 貫成人『経験の構造』勁草書房、2003年8月。

1. 現象学と複雑系／自己組織性

佐藤康邦「現象学とシステム論」は、初めに、システム論について、ベルタランフィから、パーソンズ、ルーマン、そして、マラトゥーナとバレーラのオートポイエーシス論まで簡単に解説し、そのあとに、「システム論 対 現象学」を論じている。そのなかで、両者の共通点ないし接点として、①「ともに敵対している相手として機械論的自然観、数学的自然観を挙げられる」こと（「生活世界」の概念）、②「ルーマンが社会システム論をフッサールの相互主観性の概念と結合させようとした」こと、③同様に「ルーマンがフッサールの地平の理論を採用し、無数の他の可能的な社会システムを地平として存在していると考えた」こと、④そこで「われわれが世界なり個物なりを一観点から見ざるをえない」という「観察をめぐる問題」と結びつき、それが「マラトゥーナとバレーラによる主観—客観図式の克服」と結びつくこと、以上の四点を挙げている。最後にそこでは、「両者の間に基本的相違があることは明らかであるとしても、接点が存在することもまた否定しがたい」と主張し、「両者の対話はより積極的になされなければならない」と結ばれている。

次に、野家伸也「認知論的転回—認知科学における現象学的思惟」を見てみると、ここでは、認知科学の出現によって、かつての「言語論的転回」からの逆転現象として、言語表現を分析対象とする「言語の哲学」から意識を分析対象とする「心の哲学」への「認知論的転回」が行われた、というのが著者の主張するポイントである。その文脈のなかで、脳の情報処理は「並列分散型」であるとするコネクショニズムの考えを、「ニューラル・ネットワークが個々の神経細胞の間の『協調』と『競合』による自己組織化によって、全体としてある興奮状態の分布を自発的に生成していく」とし、それを「ネガティブ・フィードバックのかかった動的な非平衡系だ」とするものと紹介している。そして、このネットワークを「複雑系」と呼び、そこに「自己組織性」「創発性」「カオス」などの新たな原理が働いている、としている。そして、このコネクショニズムの近年の関心は、「明示的な記号的表象の操作としての情報処理ではなく、『前記号的表象』の形成や変換としての無意識的な情報処理の過程に向けられているが、これはフッサールの言う前述語的経験における『受動性』の過程にほかならない」としている。このコネクショニズムにおいて、「自己組織性」の思想とフッサール現象学の接点が語られているわけである。また、認知を「認知主体から独立した世界についての表象の処理」としてではなく「イナクション」すなわち身体化した活動として捉える「イナクション理論」は、「世界は認知主体の『外』に独立してあるのでも、認知主体の『内』にあるのでもなく、認知主体と世界との間には循環的因果性が成り立っている」と主張するが、これも現象学の志向性の考えに繋がるものとも読むことができる。

他方、その続編にも当たる野家伸也の論文「生命システムとしての意識—現象学とシステム論の統合に向けて—」では、次のように論じられている。1930年代のヤーコブソンの構造言語学やゲシュタルト心理学から生まれたシステム論は、フッサールの静態的現象学と強い親近性をもっている（「構造」とは、構成諸要素間の不変的な関係という観点からとらえられたシステムのこと）のに対して、1970年代以降

の自己組織化を中心にするシステム論では、「構造」に代わって、システムの秩序の「生成」や「発展」に関心が向けられるようになったが、この新しい動向を代表するのが、「オートポイエーシス・システム」理論である。フッサールにおける意識の静態的分析から発生的分析への転換は、システム論における構造論的な見方からオートポイエーシス的な見方への転換に対応している、というわけである。そこから、①自己言及性、②自律性、③外部の不在、という三つの特質において、オートポイエーシス・システムと超越論的意識との間には、構造的同型性が見られる、と指摘する。さらに、自己言及性（自己回帰性）を特徴とする生命システムは、「観察者」の視点からの記述を放棄し、「システムそのもの」の視点からの記述を迫ってくる。ヴァレラにとって、フッサールの「超越論的転回」は、「外部の観察者」の視点から「システムそのもの」の視点のラディカルな転換に対応している、という。こうして、オートポイエーシス理論を媒介にして神経科学や社会理論と現象学を統合する可能性も拓かれ、これは「自然化された現象学」とも呼ばれているが、それは、意識を「自然化」することによってではなく、むしろ意識の超越論性を徹底化することによって、経験科学的な知見と現象学を統合しようとしている、と紹介されている。

さて、最後に、貫成人『経験の構造』にも簡単に触れておこう。「同じ場所にいるためには、力の限り走らねばならぬのじゃ」（ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』の「赤の女王」のセリフ）。貫が巻頭のエピグラフで使った引用であるが、本文を読みながらこの引用を振り返って私が思い出したのは、コマが一見すると立って止まっているように見えるが、実はビュンビュンと高速回転している、という姿だった。これは、私たちが自然に（あたかも当然のように）日常生活のなかで何かを見たり触ったりしている時、実は見えないところで、貫が「超越論的速度性」と呼ぶシステムが絶えず稼働している、ということを表すための比喩である。かつてミュンヘン現象学派が、ハイデガーが、シュッツがフッサールから離れていったのは、まさに、この自然的な次元と超越論的な次元の差異を認めるか否かであったが、著者は、この卓抜な比喩によって、この差異を説得的に蘇らせ、それによってフッサール現象学の全体像を描き直そうとする。

しかし、何より本書の特徴を表しているのは、タイトルにもなっている「経験の構造」である。「経験」がもつ、この「構造」という語を、著者は、静態的な構造と動態的な発生という対比のなかで使ってはいない。むしろそれは、「内部に自己保存機構をもつ自己調整システム」であり、「動きのなかで様々な形が生まれる動的不均衡システム」であるという。「システム」という語は、フッサールもわりと頻繁に使う語であるが、多くの場合、「諸学問の体系」というように、従来単に「体系」と訳されて来たような意味で使われている。ところが、ここで貫は、むしろ、現代のシステム論や自己組織性、さらにはオートポイエーシス論にまで繋げるような用法へと展開して見せる。冒頭のコマの比喩を思い出させたのも、このような展開であった。しかし、その接続は、まだこれからの課題であることを感じさせた⁸。

⁸ 拙著書評（『週刊読書人』、2003年10月17日号、所収）参照。

2. フッサールと自己組織性

ここで、現象学と複雑系／自己組織性の関係を、もう少しフッサールに即して考えることにしよう。手がかりにするのは、榊原哲也「フッサールにおける自然と精神」⁹である。

榊原によれば、〈自然〉と〈精神〉との関係が、〈構成する精神〉と〈構成される自然〉という図式だけでは理解できなくなることが明らかになる、という。つまり、「精神の基底としての自然」、それはまさに、能動的自我のあずかり知らぬ受動性の次元、そのあらゆる理性的活動を支える感性の次元、常にすでにいえば「無意識的」に、自然の成り行きとして、自らのすべての生を歴史的に沈殿させつつおのずから成り行く生ける自然の側面、「自己展開し」(sich entwickeln)、「展開のなかで自己組織化していく(sich organisieren)」 「私の自然」にほかならない。そういう自然にフッサールは『イデーⅡ』でぶつかっているというわけである。また、次のようにも言われている。〈精神の自然的基底〉とは、〈精神的自我の根底にあって、その理性的・能動的活動が関与することなく、身体と結びついた感性のレベルにおいて、自らの歴史を形成しつつ自己展開し自己組織化していく受動的な原志向性の次元〉であり、この次元によって精神に周囲世界が与えられ、構成されてくるのであった(259頁以下)、と。

さて、問題は、“sich organisieren”を「自己組織化」と訳すか、というところにある。これが、自己組織化やオートポイエーシスの議論に繋げられるかどうか、である。この語は、実は、フッサールの『デカルト的省察』¹⁰にも数回出てくるが、拙訳では、「秩序づけられる」ないし「自ずから秩序づけられる」と訳した(つまり、特別な術語として扱ってはいない)。フッサールが他の著作では、“sich organisieren”をどんな脈絡で使っているのかをざっと概観してみると、例えば、次のような用例が見いだされる(すべて、拙訳で示しておく)¹¹。

- ① 高次の対象や団体・組合などが組織される(VII,273)。
- ② 客観的経験の認識生が組織される(VII, 274)
- ③ 自己にとって関心領域が組織される(IX, 413)
- ④ 社会的諸形態において組織され(sich organisieren)、人格的内面的に形成される(sich gestalten)人間性(IX, 504)
- ⑤ 「印象」の「カオス」が組織される(=自己組織化する)(XI, 413)
- ⑥ 「高度に組織された」社会(XIII, 103)
- ⑦ 「子供の経験は、私たちが事物を見るのと同様に見るような仕方で組織されていない」(XIV, 116)
- ⑧ 「私が新聞を読んでいく時、連関する意味の統一が組織づけられる」(XV, 89)

⁹ 池田善昭編『自然概念の哲学的変遷』世界思想社、2003年10月、所収。

¹⁰ フッサール(拙訳)『デカルト的省察』岩波文庫、2001年2月。

¹¹ 以下の調査にあたっては、科学研究費補助金による共同研究(代表筆者)に基づいて1995年以来インターネット上に日英バイリンガルで公開してきた「フッサール・データベース」(<http://www.ipc.shizuoka.ac.jp/~jsshama/j/HUA-home.html>)を利用した。

⑨「組織された共同体」(XXVII, 71)

⑩「ヨーロッパの人間性が中世において理性という理念のもとに理性人として組織される」(XXVII, 71)

こうしてみると、この”sich organisieren”という表現が、自然に関わるテーマから社会に関わるテーマにまで及んでいるのが分かる。しかし、それらをすべて自己組織化と訳していいのかという問題は残る¹²。

同じようにして、”sich entwickeln”を「自己展開」と訳すか、も問われていだろう。例えば、次のような箇所を見てみよう。「受動的意識の絶えずより高度に展開されていく(sich entwickeln)志向性において、多様な内在的および超越的な意味付与が受動的に遂行され、意味形態へと組織される(sich organisieren)」(XI, 276)。これは、さきほど榊原が『イデーⅡ』から引用していた箇所と同様に、”sich entwickeln”と”sich organisieren”とが一緒に使われている箇所である。これも榊原流に訳すと、「自己展開」と「自己組織化」となるわけだが、果たして、そんなふうに訳するのが適切なのだろうか。

ここで、振り返って考えたいのは、フッサール現象学の中心概念の一つである「構成」という概念についても、同じような事情があるということである。さきほど引用した榊原論文でも、「〈構成する精神〉と〈構成される自然〉という図式」が問題になっていたが、それについて、見てみよう。

3. 「構成」とは何か？

さきに引用した榊原は、注のなかで、「構成」をとりあえず次のように定義している。「構成とは、〈意識に実際に与えられている与件に基づいてそれが或るもの(意味/ノエマ)として捉えられるようになること〉だ」(266頁)、と。しかし、これでは、「与件+意味付与(解釈する)=構成する」という二段階図式にならないだろうか？¹³むしろ、「自然的態度においては〈与えられる〉こと」が、「超越論的態度においては〈構成される(sich konstituieren)〉こと」として解明されるということなのではないだろうか？

フッサール自身のなかで、「構成」という語の用法について、ゆらぎがある。このゆらぎが、早い時期からフィンクによって、「構成」の二義性として指摘されていることにも関わっている。名詞形(Konstitution)はともかくとして、動詞形には大きく分けて次のような三種類が使われている。

¹² 前述(注1参照)のボンでのシンポジウムでも、クラウス・マインツァー教授(アウクスブルク大学)は、その講演「複雑系とは何か? 統合学としての複雑性研究」において、自然科学においてと同様、精神科学(社会科学)においても、複雑系と自己組織化が語られることを示した。

¹³ 筆者は、拙著『フッサール間主観性の現象学』(創文社、1995年)で、「『感覚がまず与えられ、それに生化する作用が加わり、解釈が行われることによって、近くが生じる』というのがフッサールの主張である、と言ってしまうのは早計にすぎよう」(50)、「『二段階』図式がフッサールの主張である、とするのはミスリーディングな言い方である」(64)と論じた。

- ①能動態：konstituieren（構成する）
- ②受動態：konstituiert werden/sein（構成される／ている）
- ③再帰動詞：sich konstituieren（構成される）

これら三つの形態のなかで、フッサール現象学にとってもっとも基本的なのは、再帰動詞であるように思われる。例えば、代表的な『イデーⅠ』の箇所では、「意識は絶対的存在であり、そこで〔そのうちで〕すべての超越、それゆえ結局、心的物的世界の全体が構成される(sich konstituieren)」（III/1, 116）とフッサールは述べている。しかし、同じ文脈のなかでフッサールは、能動態も使っている。例えば、「絶対的存在はあらゆる世界的超越物を、おのれのうちに内蔵し、それをおのれのうちに”構成する(konstituiert)”」（III/1, 107）、というような箇所である。他にも、「構成する(konstituierend)絶対的意識への還帰」（V, 78）といった箇所にも、能動態が見られる。また、受動態も使われているが、これは両者の中間的な性格をもつといえる。こういうなかで、やはり、基本形は、”sich konstituieren”という再帰動詞の形ではなかろうか。しかも、「意識（主観性、作用）」「構成」「世界（対象、自然、存在）」の関係について言えば、「意識が世界を構成する」というのではなく、「意識において〔のうちに〕(im Bewußtsein または、bewußtseinsmässig)世界が構成される」というのが、フッサールの用法の基本形だと思われる。

実際、私たちのフッサール・データベース¹⁴によって、能動態、受動態、再帰動詞の三つの用法が、いくつかの代表的な著作のなかでどう使われているかをざっと調べてみると、次の表のような具合になっている。時期的にもばらつきがあり、必ずしも一つの用法から別の用法に移ったとも言えない。それでも、『論理学研究』の初めの頃には能動態が多く、『イデーⅠ』の時期には、能動態と再帰動詞が半々くらいだが、『イデーⅡ』や『受動的総合の分析』などでは、再帰動詞が多くなっていることが分かる。

	再帰動詞	受動態	能動態	合計
論研Ⅰ	6	11	10	27
論研Ⅱ/1	45	5	22	72
論研Ⅱ/2	36	8	26	70
イデーⅠ	35	16	32	83
イデーⅡ	158	149	60	367
イデーⅢ	38	16	16	70
受動的総合	137	120	67	324

さて、では、”sich konstituieren”を「自己構成」と訳すべきだろうか？ ”sich organisieren”を「自己組織化」と訳し、”sich entwickeln”を「自己展開」と訳すなら、”sich konstituieren”も「自己構成」と訳してもおかしくない。しかし、そうなると、”sich bewegen”も「自己運動」と訳すのか。これはやはり単純に「動く」と訳すだろう。とすると、「組織される」「展開する」「構成される」でもおかしくないはずである。逆に、”sich organisieren”を「自己組織化」と訳すなら、つまり、”sich

¹⁴ 前注（注11）参照。

organisieren”を「自己組織化」と訳すことによって、フッサール現象学を自己組織性の議論へと繋げるのなら、あるいは、そう訳さず、「組織される」と訳すにしても、そこに「自己組織化」を読み込んで同じように繋げるのなら、「構成される(sich konstituieren)」もまた、「自己構成」として、つまり、「自然の自己構成」と解することで、むしろ、「構成」そのものが自己組織性の議論へと繋げられることになる。

他にも、次のようなフッサールの概念は、複雑系や自己組織性に繋がりそうに思われる。例えば、「受動的志向性」「受動的発生」「地平」(Horizont)「絡み合い」(Verflochtenheit, Verflechtung)「含み合い」(Implikation)「相関関係」(Korrelation)「受動的志向性」「受動的発生」などである(これらはすべて、さきほどの「構成」という概念とも密接な関係をもっている)。

例えば、「受動的発生」について見ると、フッサールは、「能動的発生においては、自我が、産出し構成するものとして機能している。……能動的活動の構築はすべて必然的に最低層として、あらかじめ与える受動性を前提しており、これを追跡していくと、受動的発生による構成に行き当たることになる。生活のなかでそこにある単なる事物として現れるものが、”それ自身”という根源性において与えられるのは、受動的経験がもつ総合によってである」(CM, 79)と、述べている。このあたりの「受動的発生による構成」の議論は、「自己組織性」の話に繋げてもおかしくないであろう。

他にも、『イデー I』のなかには、次のような、顕在性と潜在性についての議論がある。「このような意識仕方は、そのように”遂行され(vollzogen)» ていなくとも、すでに”発動している(regen)» ことはありえ、”背景» において登場してることがありえる。このような非顕在性も、すでに”或るものについての意識» なのである」(III/1, 189)、と。フッサールはそこですでに、受動的、潜在的、非顕在的な志向性のありかたについて語っていた。そういう文脈のなかで、フッサールは次のように書いていた。「志向的体験という概念はそもそも、すでに、潜在性と顕在性との対立を前提するものである」(III/1, 262)。つまり、「対立を前提する」とは、潜在性と顕在性の両方が志向性のうちに含まれているということの意味している。また、そういう文脈のなかで、「地平」(Horizont)という概念も登場するわけである。これも、『イデー I』だが、フッサールは次のように書いている。「顕在的に知覚されたものは、未規定な現実という曖昧に意識された地平によって、一部は浸透され、一部は取り囲まれている。……曖昧な未規定性が空漠と霧のように広がっていて、そこには直観的なもろもろの可能性や推測が群がり、ただ世界の”形式» だけが、まさに”世界» として、その下図を描かれているにすぎない。霧が深くて決して完全には規定されえないような地平が、必然的にそこには存在する」(III/1, 57)。こういう「地平」という概念に含まれている考えも、自己組織性という話に繋がっていくものと捉えることができるだろう。

さらに紹介したいのは、「絡み合い」(Verflochtenheit)という言葉である。『イデー I』の最後の方で、「種々異なる領域(Regionen)の絡み合い」(III/1,354)が予告されていたが、『イデー II』において「領域」的存在論が初めは、「自然に基づけられて精神が構成される」という、一方的な「基づけ(Fundierung)」として開始され

る。ところが、次第に、「基づけられた」ものが、新しい統一となることが分かってきて、さらに、「基づけ」関係が、一方的ではなく、前述の榊原論文でも指摘されていたように、「精神の根底に自然がある」という仕方で、相互に絡み合っていることが明らかとなってくる。『イデーⅡ』は、この「絡み合い」を具体的に展開した著作とすることができる。『イデーⅡ』の原型的な草稿においてすでに、フッサールは、「自然と身体、さらにそれとの絡み合いにおいて心は、互いに相互関係において、互いに一緒になって構成される」(V, 124)と述べていた。このように「絡み合い」という概念は、フッサールの「構成」論のなかで重要な役割を果たしている。

またもう一つ、同じような語で少し異なる文脈で使われているのが、「含みあい(Implikation)」という概念である。例えば、『第一哲学』(1924年)には、次のような箇所が見られる。「純粹自我は、そのうちに、予想もしていなかった、深く隠された、志向的含みあい(Implikation)の間接性を蔵している」(VIII, 123)、と。また、『現象学的心理学』(1925年)には、次のような箇所が見られる。「意識の本質に属しているのは、バラバラにあること(Ausereinander)ではなく、互いに入り込み(Ineinander)互いに入り組んでいる(Durcheinander)こと、志向的な絡み合い(Verflochtenheit)、志向的に含み合っている(Beschlossenheit)ことである」(IX, 37)、と。つまり、さきの「絡み合い」というのは、ノエマ的な場面についての話であり、いまの「含みあい」というのは、ノエシス的な場面についての話であるが、両方の場面において同じようなことが指摘されていると言える。

そこからさらに、ノエシスとノエマの「相関関係」(Korrelation)とフッサールが呼ぶ事態に目をやれば、これも自己組織性の話に繋がっていくものと考えることができる。この「相関関係」という語も、さきほどの「構成」という語と絡み合いながら、フッサール現象学にとって重要な概念になっている。『イデーⅠ』では、「ノエシスとノエマの相関関係」(III/1,211)を、「現出者の〈一性〉と諸現出の〈多性〉との相関関係」(III/1, 351)と言われたり、「存在と意識との相関関係」(III/1, 355)と言われたりしている。さらに、晩年の『危機』書には、「相関のアプリオリ(Korrelationsapriori)」について書かれた有名な箇所がある。よく引用される箇所だが、改めて引用しておこう。「この経験対象と与えられ方との普遍的な相関のアプリオリを最初の思いついた時(それは、私の『論理学研究』を推敲している間の、ほぼ一八九八年頃のことであるが)、それは深く私のこころを動かしたので、それ以来私の全生涯の労作は、この相関のアプリオリを体系的に完成するという課題によって支配されてきた」(VI, 169Anm.)。この「相関のアプリオリ」は、フッサールが「構成」という概念で考えてきたことを別の角度から語るものに他ならない。

以上によって、フッサール現象学のなかで自己組織性という考え方に繋がってくるものがどういうところにあるかが浮かび上がってきたと思われる。

おわりに

池田善昭は『システム科学の哲学』¹⁵のなかで、「主観—客観のパラダイムに基づく超越性の場面から、一転して、主体と世界との相互移入の内在性へと徹底する」(二一頁) 必要があり、それが現象学とシステム論が繋がるポイントになると指摘している。さらに続けて、「「相互包摂」(Ineinander)、「相互内属」こそが自己組織能の世界であり、システム概念の基礎でなければならない」(22頁)と述べて、そこから現象学に話を繋げて行っている。つまり、「いままでのシステム論に混乱を引き起こした基本的な原因は、〈complicated (込み入った) と complex (複雑な) との差〉を、単に〈複雑性の程度の差〉として客体的に把握しようとしたところにこそあるのではないか。両者の相違は、主体をそのシステムの中に含ませるか否かの相違に求めるべき」(24頁)として、そこにまさに、現象学とシステム論を繋いでいく必要があると主張している。そこから、「現象学やハイデガーやメルロ＝ポンティの存在論との連関から、システム論の見直しがいま必要ではないか」(25頁)と述べるわけである。この話は、さきほどフッサールに即して「相関関係」について指摘しておいたことに繋がってこよう。

さて、まとめておこう。一方のノエマの側で、経験の対象が、〈対象と地平〉という構造をもち、〈地平の地平〉として〈世界〉が捉えられていること、そして、経験の対象が、〈受動的綜合〉ないし〈受動的発生〉という形で、しかも、様々な領域が〈絡みあい〉のなかで、〈構成される〉こと、こうしたことのなかに自己組織性という考え方を読み取ることができる。他方のノエシスの側でも、経験する意識についても、さまざまな意識の〈含みあい〉があること。そして、最後に、ノエマ(経験の対象)とノエシス(その与えられ方、意識仕方)との間の相関関係があること。これらすべての関係のなかに、「主体と世界との相互移入の内在性」が成り立っている。こういう仕方でフッサールが考えた「世界の超越論的構成」のあり方にこそ、自己組織的システム論との接点があるように、私には思われるのである。

[追記]

本論考は、注1で記したように、統合学術国際研究所主催のシンポジウムで口頭発表され、その後、同研究所編『複雑系、諸学の統合を求めて』(統合学研究叢書 第2巻、晃洋書房、2005年4月)に収録された原稿を再録したものである。再録にあたって、本冊子『フッサール研究』のために若干手を加えた。

¹⁵ 池田善昭『システム科学の哲学』世界思想社、1991年。